



▲「こおりやま街の学校」の学校長に就任

域で感じ取れる空気は、「まちに面白いことが起きたらうれしいな」と思う若男女が多いことです。面白いと感じるには、自分が少なからず関わっているかどうかが大事です。まちを面白くしている人が、同じ考えを持つグループ内でしか活動がなければ、「まちは面白い」という人は広がりませんし、まちの満足度も上がらないでしょう。だから、まちに関わっていることを、どうみんなに感じてもらえるか、気付いてもらえるかは重要ですね。

「砕けた場」を創出するのが1つのアイデアですね。例えば、奈良県の奥大和地域では、芸術祭を開催していて、そこで僕も一緒に始めたのが「スナック」です。なぜ、スナックなのかというと、地元の人に来てもらいたかったからです。スナックには、地元の林業を営むお父さんや歴史ある寺のお坊さんまで来まして。そんな地元の人たちと、アートを観に来た東京や大阪の若者が、吉野杉とかお寺のことについてスナックで語り合う場が生まれました。地元の人に来やすいのは、スナックやバーベキューのようなふわっとしたものであったりします。カレーを食べる会みたいなものでも良いんです。

まちを面白がれる人が まちを面白くする人

普段出会わないような人たちが関われる関係を、僕は「斜めの関係」と呼んでいます。水平にファンを増やす手法は30年も前からやっていることですが、それで

もなかなか変わらない状態を変えるには、斜めに何かが出ないといけません。砕けた場はどうやって作るのでしょうか。みんなに役割を作れるかどうかですね。スナックでは、僕がマスターになったり、ママが切り盛りすることもあれば、飲みに来ていたお父さんが途中から手伝うこともありました。

あと、お手本があまり完璧じゃないことですね。完璧じゃないから、「これから自分でもできそう」と思ったり、「やってみいな」って思って手伝ってくれるんです。奥大和では、芸術祭の流れの中から、スナックの看板を使って若い人が公民館とかゲストハウスとかいろいろな場所で自発的にスナックを開きました。この看板に火が灯ることで、みんなが何となく地域に関わっている、自分が面白いことに関わっているという感覚になるんですね。

普段出会わない 人たちが関われる関係 「斜めの関係」をつくる

——移住者を受け入れてまちづくりを考えていくに当たり、重要なことは何でしょうか。
佐賀市富士町の首木という集落で

——上越市では人口減少が課題となっている中、移住が期待されています。市外に出た人がUターンなどで戻ってくるために、重要な要素は何だと思いますか。
そこに、居心地の良い同世代のコミュニティがあるかどうかですかね。少し離れていても、同世代が地元で何をやっているかが見えていたり、そこに自分も足を運べるような仕組みがあるかどうか大事かもしれませんね。



指出一正 ● さしで かずまさ
昭和44年群馬県生まれ。未来をつくるSDGsマガジン「ソトコト」編集長。有識者としてさまざまな省庁の委員を務めるとともに、全国各地の地域のプロジェクトに多く携わっている。

新春特集1

まちづくりのいまと未来を考える

皆さんは、自分たちの暮らすまちがどうあってほしいですか。
最近テレビや新聞でよく聞くようになった、国連が提唱する持続可能な社会を目指す目標「SDGs」は、まちづくりに欠かせない考え方になりつつあります。
SDGsをテーマとした専門誌を発刊し、環境省の主催による「SDGsローカルツアー」をはじめ、これまで何度も上越市を訪れている指出一正さんに、日本各地のユニークなまちづくりの取り組みや、今後のまちづくりのヒントについて伺いました。

——まちづくりが活発なところや元気な地域はどんなところがありますか。

例えば、福島県の郡山市では、郡山の魅力や可能性を再発見しながら地域を盛り上げていく「こおりやま街の学校」という企画を行っています。僕はその学校長をしています。ここでは、地元の楽器屋さんからウクレレの演奏を学ぶなど、地元の人たちが先生役として活躍しています。まちにはいっぱい魅力的な人がいて、その魅力的な人が先生になることで、いろんな人が「まちは面白いな」って気付く人が増えていくんです。

——よく「うちのまちには何もなし」ということが聞かれます。
まちを面白くする人は、まちを面白がれる人です。「よく見たら、これすごく面白い絵だね」というような地域の魅力を発信できる、まちを面白がれる力をどう養うかが大事なキーポイントだと感じます。

——そう思うのは、その人が「まちに面白いことが起きている」と感じづらいうだからかもしれませんね。元気な地元の霧囲気ですね。
郡山市の「こおりやま街の学校」も、地元の皆さんと職員と一緒に、一つずつ手作りで実施しているの、仲間に入るのに居心地が良いんですね。「自分も仲間になれそうだな」となりやすいので、非常に良い雰囲気ですね。

私が変わる、
上越市が変わる、
世界も変わる！

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

国連が採択した「SDGs=持続可能な開発目標」に定められているのは、世界を変えるために合意された17の目標。どれもスケールが大きく、身近には感じづらいものもあるかもしれませんが、より身近な「地域」に置き換えてみるとどうでしょう。指出さんへのインタビューでは、私たち一人一人がまちを面白がり、できること、やりたいことから始めてみるのが「面白いまち≡暮らしやすいまち」につながっていくとお聞きしました。

楽しみながら、そして仲間を増やしながらか市内で活動している大勢の人たちのうち、5つの事例をご紹介します。



▲ 菅木集落のマウンテンバイクのコース

は、集落の皆さんと博多のマウンテンバイクの若者が一緒になって、「エンデューロ」というマウンテンバイクの国際大会を開いています。この取り組みは、過疎地域活性化の事例で総務大臣賞をとっています。僕は「弱さの交換」と言っています。が、人口減少が進む菅木の先輩世代と、マウンテンバイクで自由に走り回れる山を借りた博多の若者が出会って、菅木の集落から「うちの地域だったら使っていないよ」という話から始まったものです。

菅木の人たちが「自分たちのまちは面白い」と思うためには、行政が働き掛けることばかりではなく、何かが起こるためには、その地域の人も何かを受け入れたり、何かを交換するような気持ちがないと駄目です。移住者に対して「お前は何かをやってくれるんだ」、「昔は良かったんだ」と偉そうに言う人がいますが、「では、あなたは移住者に何をしてあげていますか？」と。そして、過去のことに話さない人たちのところに、若い人は来ません。なぜなら、その過去は共有できないからです。あとは、お金を渡すことだけが地域づくりではありません。対症的法的に行政が補助金を出したところで、すぐに続かなくなってしまいます。それは行政にとっても、地元にとっても幸せなことではないですね。大事なことは、まちを面白くしたいなと思う気持ちが地元の人に芽生えることです。

未来を取り入れていく 姿勢を育む

上越市にはさまざまな歴史ある建物や文化がありますが、どうアピールしていったら良いでしょうか。まちの歴史の文脈から外れている方が、意外と人は集まりやすかったりします。例えば歴史好きな人向けの場を作ると、歴史好きな人は来るでしょうが、本当に来てもらいたいのには、おそらくそれを知らないタイプの人たちはではないでしょうか。——では、例えば高田だったら、必ずしも町家や雁木でなくとも良いということでしょうか。

僕は20代の頃から上越に行くのが好きでした。そこで感じていたのは、上越は「自分のまちらしさ」をしっかり持っているということです。良いものをいっぱい持っている地域ほど、なかなかしんどいものです。「昔は良かった」という話になりがちです。でも、昔のことは置いておいて、未来のことを語れば、赤ちゃんもその仲間に入れます。上越は未来の地域を作っているポテンシャルがたくさんある場所です。なので、「自分たちのまちらしさ」を更に輝かせるため、昔に戻ることを目指すのではなく、古いもので良いものを残しながら、未来を取り入れていく姿勢を育んでいくと、ますます「上越らしさ」が増していくと思いますよ。

「斜めの関係」で地域をつなぐ人たち

— 中山間地域支え隊 —

上越市で持続可能な社会を考えるとときに不可欠な中山間地域。「中山間地域支え隊」として、さまざまな集落に向いてボランティア活動をする中で、普段出会わないような人たちが関われる「斜めの関係」を築いているお二人からお話を伺いました。



千葉 逸太さん 小山 美和さん
株式会社ダイナム

弊社では、創業55周年に当たり、お世話になった地域に恩返しをしたいと思い、上越市では中山間地域支え隊に参加しました。主に草刈りなどをお手伝いしています。初めは地域貢献を目的に参加しましたが、回数を重ねるうちに顔を覚えてもらえるようになり、私たちも「皆

さんにまた会いたいな」と思うようになりました。地元の皆さんは温かい方ばかりで、まちで会った時に声を掛けていただいたり、作業後にお土産として、自分の田んぼで採れたお米で作ったお赤飯をいただいたときはうれしかったです。また、ストレスフリーな大自然を五感で味わえるので、心身共にリフレッシュできるのも良いですね。

肉体的には疲れても、それ以上に得られるものがたくさんあります。作業後、心地良い疲労感の中、振る舞っていただいた漬物のおいしさ、地域の方との温かいつながり、参加するたび得られる新鮮な気持ちと感動は、実際に参加しないと体感できない良さだと思います。



▲ 牧区棚広集落の皆さんと



みずいろ実行委員会

代表 坂詰 つぐみ さん
(☎070-7475-3210)

「地元がちょっとでも元気になるように」と、「ぐるわ〜ず♪」として10年以上活動を続ける中で、もうちょっと深く、そしていろんなことをやってみたいと思い、立ち上げたのがこの会です。フリーペーパーの作成をはじめ、小さい子からお年寄りまで、地域の人や地元の企業の皆さんと一緒に手作りのイベントを自由に楽しく行っています。これまで、直江津を青い花で彩る「青い花の道」のほか、令和3年は地元の小学生と一緒に直江津ショッピングセンターエルマールで



Tシャツを展示しました。継続することが大事だと思いますので、今後も「ゆるいつながり」で長く続けていきたいですね。



柿崎を食べる会

代表 長井 慎也 さん
(☎025-520-6003)

「柿崎の魅力」を知ってもらおうと、柿崎の農家8人で19年前から活動しています。地元の酒蔵や酒造の「和希水」のお酒の原料として使われる酒米や、新潟市の飲食店で販売・使用してもらう柿崎産コシヒカリを、大出口泉水が流れる東横山地域の棚田で栽培しているほか、干し柿やそば、長人参を作っています。

昨年からは、地元の小学生と田植えから稲刈りまで一緒にお米を作っており、収穫したお米を使ったお酒を成人式の日にプレゼントしたいと考えています。

高齢化で離農が進む中、農業に興味のある移住者をバックアップしています。定住者が増えていくとうれしいですね。



できること、やりたいことをつながっています！

上越市で「まちを面白がる」人たち



脇野田やかりの会

代表 稲葉 摩利子 さん
(☎025-527-3270)

北陸新幹線開業の2年前から活動しています。会の名前の由来は、上越妙高駅の前身であった「脇野田駅」から。「過去＝歴史」に感謝し、故郷を大切にする思いを胸に、「現在＝新幹線時代」に何ができるかを考え、「未来＝明日」を担う若者や子どもたちにそれを伝え応援する…。そんな思いで、上越妙高駅やその周辺で活動してきました。

現在は、若い仲間たちに「この先もここで幸せに生きていくためにも、共に地域を盛り上げましょう！」

と、市内各所で共にイベントをコラボ展開しています。誰かに頼まれたわけではなく、自分たちの想いを大切にしたいこれらの活動は、絶やしたくないですね。



DIGMOG
COFFEE



オーナー 大塚 いちお さん
仲町4-3-14
(☎070-2794-5701)



子どもの頃から慣れ親しんだ雁木通りで、その魅力を生かしたスペースを作りたいという思いから、コーヒーショップを開きました。

コーヒーは仕事時間や休憩時間、読書や音楽、旅行やドライブなど、いろいろなことと相性が良く、たくさんの方と接点が作れます。お店では、さまざまなワークショップや期間限定の展示のほか、現在は自粛中ですが音楽イベントやトークイベントなども行っているため、いろいろな人に立ち寄ってもらえたらうれしいです。

新たな発想や出会い、趣味や自身の世界が広がるような、ここにしかない特別な空間を作れたらと思っています。

